光悦筆観世黒雪奥書唄本藍染川

料紙の装飾 —「寛永の名筆展」より

国宝西本願寺本三十六人集、源氏物語、平家納経などの遺品によって知られるように、平安後期には写本や絵巻の詞書、また写経などに美しい装飾料紙が用いられています。その種類は、金銀箔散、描絵、唐紙(からかみ—染紙に木版雲母刷で模様を摺ったもの)などがあります。西本願寺本三十六人集はこうした各種の装飾料紙に、当時の能筆の人々が本文の書写を担当しています。その巧みな仮名の連綿と下絵の調和はまことに優雅で高い品格をもち、当時の貴族たちの洗練された感覚が偲ばれます。このような料紙装飾の伝統は鎌倉から室町時代へと受けつがれ、御宸翰の歌切や写経などの遺品にみられますが、平安時代の優美な面影はなく、むしろ沈滞しているかのように思われます。料紙の装飾に新しい展開がみられるのは、室町末の連歌懐紙や謡曲本表紙などからです。能や連歌会の流行から謡曲本の写本や連歌会の記録が多く行われると、上層の人々の間では金銀泥装飾紙を用いた贅沢な写本がつくられています。とくに謡曲本の表紙は、曲目の内容の一部を絵画的に描くという表紙絵としての新しい発想がみられます。また一方色紙や短冊にも金銀泥の下絵がみられます。このようにして再び流行しはじめた料紙装飾は、慶長から寛永期にかけて急速に発展しました。それは、唐紙(からかみ)の技法を再興した木版雲母刷と宗達派風の新しい下絵の流行です。

木版雲母刷は平安時代以後は途絶えたかの如く遺品も稀でしたが、慶長頃から板行が盛んになるとその表紙や色紙、また和歌巻などに用いられます。木版雲母刷の文様は、竹・蔦・梅・桐などの草木の大柄な図案が多くなり、それらと同様の構図が宗達派風の肉筆金銀泥下絵にもみられます。このような新しい装飾料紙には、個性的な光悦流の書風がよく調和し、宗達下絵に光悦書という和歌巻や色紙の傑作が数多く遺っています。勿論色紙や短冊には伝統的な金銀泥絵も行われ、それらは主として公卿や僧侶などの間で用いられていますが、そこにも時代の新しい感覚がみられます。

以上のように永い伝統に根ざしながら時代の好みにふさわしい華麗な展開をみせた料紙装飾は平安末に次ぐものといえましょう。

季刊 美のたより No.25
昭和48年10月1日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.